

本当に信頼される 介護支援専門員をめざして

[第3回 最終回]

福田多恵子^[ふくだ・たえこ]

介護老人保健施設うぐいすの丘(長崎県)
相談室長



今回は、当施設において実際にあった3つのケースを振り返り、そこで得た学びとともに、「その人らしく生きる支援のためのマネジメント」についてお伝えしていきたいと思います。

3つのケースから学ぶ

1 夫婦2人暮らしのケース

夫：82歳、要介護2、ADL：A1、認知症高齢者の日常生活自立度：Ⅱb

妻：81歳、要支援1、ADL：J2

夫婦には子どもがおらず、二人三脚で生活してきました。あるとき、介護者である妻が体調不良で入院し、夫は老健施設に入所。夫が入院中の妻を心配するため、妻への面会を数回支援しました。

妻は徐々に回復し自宅退院となりましたが、すぐに夫の介護ができる状況ではありませんでした。そこで、妻の体調が落ち着くまでの期間を考え、夫の退所日を妻の退院の5日後としました。妻は夫へ電話をかけ、「元気になり近々退院する」と安心させました。

しかし、その4日後に妻が体調不良で再入院。すぐにそのことを夫に知らせましたが、休日の雨の夜といった当時の状況もあり、妻との面会には至りませんでした。その翌日に妻は他界。その後、夫は妻の死を受け入れられない日々が続きました。

【振り返り】

高齢者にとって、一瞬一瞬の「いま」が大切であることを学びました。妻が再入院したときに、躊躇せず面会ができるよう支援していれば、夫は現実を認識でき、妻の死を受け入れ、前に進むことができたかもしれません。

夫婦や家族のつながりを支援するためには、どんなことがあっても「いま必要なことはいま実践する」という覚悟と、機動力のあるマネジメントが重要であると感じたケースでした。

2 男性1人暮らしのケース

A氏：94歳、要支援2→要介護2、ADL：A2、認知症高齢者の日常生活自立度：Ⅱa、キーパーソン：長男(県外在住)

夕食の確認のためA氏に電話したところ、声がいつもと違っていたため訪問。状況からハムをのどに詰まらせたようで、口腔ケア等の対応を実施。受診を勧めるも、本人は「大丈夫」と言い張ったため受診はしませんでした。普段の状態とは違っていたので再度訪問しようと思い、そのときは自宅を後にしました。

2時間後、たまたまA氏の自宅前を通りかかった民生委員が、玄関の明かりが点いているのを不審に思い、市外にいる長女へ電話。すると、A氏に電話確認した長女から当施設に、「父が胃がむかむかすと言っている」と連絡が入り、すぐ自宅へ再訪問しました。

庭側へ周り窓からのぞくと、A氏が床に横たわり杖で必死に障子を叩いていたので、窓ガラスを割り中へ。A氏は、会話はできましたが顔面蒼白で呼吸が荒く、救急車を呼び病院に搬送しました。その後、長女夫婦と長男夫婦が病院に到着。A氏は長男たちの顔がわかり安心した表情でうなずきましたが、その4時間後に他界しました。

なお、A氏は日頃より財産分与や棺に入れてほしい物について話していたため、ご自分で長男に伝えるようにとお話ししましたが、実際のところ、長男にその話は伝わっていませんでした。